



語り手 佐々木誓信さん
 (明治25年生まれ)
 収録・昭和35年5月9日

あらすじ

昔、軽業師と歯医者さんと山伏と三人が死んで閻魔の前で取調べを受けた。まず、山伏は、「人間世間で法螺を吹いて、子どもを怖がらせたから、地獄へやってやる」。次は軽業師。「おまえも妙なことをばかりしてお金を取ったから、罰に地獄じや」。最後は歯医者。「人を痛い目に合わせて高い金を取ったから地獄じや」。三人がみな地獄へやられました。鬼が「閻魔さん、三人をどう処分しましょうか」。「熱湯の中へ追い込んでやれ」。三人を煮え湯の釜に投げ込みました。山伏は水の印を結ぶと、熱くありません。三人が、「人間世界の垢を落とそう」と湯を使っています。赤鬼が真っ赤に怒り「閻魔さん、三人はええ爛じやと垢を落とすおりますが、どうしましょう」とそれなら針の山へ追い上げてやれ。赤鬼は今度は青鬼を連れてきて、

手伝わせ針の山へ追って来ますので、軽業師が軽業の術で、山の一本松へ三人を登らせ、「ここでおいで、甘酒進じよ。木の上で呼んでいきます。鬼は「閻魔さん、「ここでおいで」と木に登って呼んでおられます。どうして呼んでおられるのか、口の中へ入れたら、歯医者さんが、歯の抜ける薬を一人に分けて、三人連れで鬼の歯の根元へすり込みました。鬼の歯がみな抜けていくら噛んでも三人の者は死にません。鬼は「閻魔さん、わたしの歯がみな抜けました」「しかたがない。丸飲みにせえ」。鬼が目やパチパチさせて飲み込みました。三人が鬼の腹の中を見ますと、広いとも広いとも……。軽業師が「あの下に綱に引いてあるのは何かい。歯医者さんが「鬼の腹の中の血管で、あの筋を引っ張るとシッコがしとうなるんじや」「その隣のは何か」「あの綱を引っ張ると鬼が尻をひるんじや」「それはおもしろいな」。上を見ましたら、喉の隣に小さい穴が二つ。「何じやろうか」「あれへ伝うてる綱



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_201007.html

あ引つ張ると、鬼がくしやみするんじや」「一緒に引つ張ってみよう」「二、二、三」。引つ張ったら、鬼が苦しみます。ヒヤクシヨ ヒヤクシヨ……ブーッブーッ……「もういつべんやれ」「一、二、三……」
 本当に鬼は閉口し、三人を吐き出しました。三人が飛んで来たのは、元の人間世界で、それぞれ死んだところへ帰ってきたそうです。

解説

語り手の佐々木さんは当地の光円寺の住職だった。語りの見事さをしつかり味わっていた。

なお、これに似た話で森脇太一著『江津の昔ばなし』(昭和48年・自刊)に「閻魔と交代」として、彦八が死んで閻魔の前に行って、閻魔に面白話を聴かせることになり、閻魔の装束を借りて、そのまま閻魔に代わって、今でも楽しんでいっているという。

(元島根大学文学部教授)

